現代短歌を用いて和歌の技法への理解を深める授業実践

大石　真由香

はじめに

二〇一八年八月に、高等学校の新学習指導要領が文部科学省から告示された（平成三〇年告示学習指導要領）。これを受けて近年、古典文学の特に若手研究者の中で、初中等学校および高等教育機関における古典教育のあり方に対する意識の高まりが見られる。国文学研究資料館による日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画・国文研主導共同研究「青少年に向けた古典籍インターフェースの開発」（二〇一五-二〇一七年度）において「初中等学校における古典教育」研究会が開かれ、二〇一九年三月にその成果が報告書としてまとめられた[1]。また、日本文学協会編『日本文学』六九号（二〇二〇年一月）には「文学教育の挑戦」という特集が組まれ、さまざまな立場で文学教育に関わる研究者による授業実践や問題提起がなされた。中でも国文研主導共同研究「青少年に向けた古典籍インターフェースの開発」の二〇一六-二〇一七年度研究代表者である小山順子は和歌教育の実践に力を入れ、「和歌を「近づける」ための授業実践[2]」（小山A）、「引歌・引用への理解を導く授業実践[3]」（小山B）において授業実践報告をしている。

本学教育学部は在籍する学生のほとんどが教員免許を取得し、そのうち約七二％が実際に教員になる（二〇一九年度実績）[4]。このような環境の中で、韻文学を専門とする筆者が学生に対し何を提供できるのかということが問題意識としてある。本稿では、和歌の技法の文学的効果について、実感を伴った理解へと導くことを目指して行った授業実践の報告を行う。

一、「国文学特講Ⅱ」概要

本稿において報告を行うのは、二〇一九年度「国文学特講Ⅱ」に

おける実践内容である。一年生後期の開講科目であり、大学入学後初めて本格的に古典文学を扱う科目である。履修者数は六〇名、うち四七名が国語専修、一三名が特別支援教育専修および学校心理専修の国語を選択した学生である。[5]

履修する学生にとっては、大学受験から半年以上が経過し、高校で身につけた文法的知識の記憶が薄れ、読解力にも自信を失う時期での受講である。[6]当該科目において扱う作品は、学生にとって馴染みがあり、かつ古典文学を読むために必要な基礎知識（文学史および文法的知識を含む）を身につけることのできるものであることが求められる。このことを踏まえ、当該科目では『百人一首』を扱うことにしている。

第一回授業時にアンケートを行った際、『百人一首』を扱うことに対して次のような意見・感想が得られた。

・百人一首に生まれて初めて触れるので覚えられるか不安

（国語・男子）

・「小・中とかでみんな百人一首を覚えさせられたから知ってる」というのをよくきくけど、私は全然知らないからおいていかれないか心配。

（国語・女子）

・古典苦手（ママ）ですが、ちはやふるを読んで百人一首をがんばっておぼえたので、（今は半分くらい忘れてますが）たのしみです。

（国語・女子）

・自分の出身小学校では百人一首大会や朝活動で百人一首をするなどしていたのでそのような学校の配属になったら役立つと思う

（国語・男子）

・小倉百人一首を理解し覚え、かるたで戦えるようにしたいです！ふれあい実習校の児童たちが、とても強くてすごかったからです…。

（国語・女子）

『百人一首』は、小中学校において暗記の宿題を課されたり、百人一首大会が行われたりして多くの体験をしている学生と、ほとんど触れたことのない学生との間に知識の差の大きい教材であると言える。さらに現在は漫画『ちはやふる』[7]等の影響により『百人一首』に対し興味と学習意欲をもっている学生もいる。また、教員志望の学生が多いため、将来に活かせるという理由で学習意欲をもつ学生もいる。[8]

このように、『百人一首』は義務教育課程の古典教材として扱われることの多い作品と認識され、学生の学習意欲は高いものの、既存の知識や興味の度合いには学生によってかなりの差があることが予測される。

二、問題の所在

前掲小山Bは、漫画およびポップソングを用いた引歌・引用の授業実践報告を行っている。筆者も、古典文学作品における本歌取りや引歌の説明に漫画やポップソングなど現代における他分野の作品を援用することは有効と考えており、本稿で扱う「国文学特講Ⅱ」においても漫画を用いている。[9] しかし、漫画を用いた授業に課題がないわけではない。

小山Bはリアクションペーパーを利用して「学生たちの引歌・引用体験」を多く引き出し、「引歌や引用を使ってのやり取りが、機知を発揮し、豊かな文脈と表現を生み出してゆくこと、また文学が既存のものを含みこみながら成長してゆくものであることを、実感を伴いながら理解する土壌を培う」という目的を達成している。しかし一方で、「引歌・引用の体験を記入する学生は、受講生のうち毎年半数に満たない」という課題もあげている。

また、漫画やポップソングなど所謂サブカルチャーを用いた授業では、学生の興味・関心が例としてあげられた現代作品の具体的な文脈のほうに向いてしまい、十分な教育効果が得られないということも起こりがちである。当該授業の最後に、「古典和歌の技法（本歌取り）や作品背景の説明に漫画を使ったことは、あなたの理解の助けになったと思いますか」というアンケートを実施し、五一名分の回答を得た。集計結果は以下の通りである。

・助けになった　四四名
・どちらでもない　六名
・使わないほうがよかった　一名

集計結果のみを見れば概ね好評だったと言えるが、「助けになった」と回答した学生の自由記述欄の内容には、

・漫画で古典和歌に親しもうという気持ちになった　（国語・女子）
・漫画等イラストや現代らしい部分があると堅くるしい古典の印象が和らいでおもしろかった。「ちはやふる」等身近なものからよんでみたいと思う。　（国語・女子）
・ただ説明されていたらきっとわからなかったけれど、マンガだったからわかりやすかった　（特別支援・女子）

のように、イラストがある、身近であるといった漫画ならではの分かりやすさを指摘するものがある一方で、

・ちはやふるをよんでたの[ママ]で感情移入しやすかった。（国語・女子）
・「ちはやふる」を知っていたので、親しみやすく、理解することにつながった　（国語・男子）

のように、その漫画をあらかじめ知っていたことを理由としてあげるものが散見された。これらの回答からは、理解が促進されたというよりは、「知っている話だったから楽しめた」というレベルにとどまってしまっている可能性が示唆される。理解の助けになったか

どうかについて「どちらでもない」と回答した学生の中に、「その漫画を読んでいなかったから」（国語・男子）と答えた学生がいたことからもその可能性がうかがえる。

イラストがあるという漫画の特徴は、うまく利用できれば学生の理解を促進する助けになる。しかし現代作品、殊にエンターテインメント漫画は物語が身近であり学生の感情移入を誘いやすいがゆえに、学生の意識が物語の内容へと向きやすく、本来理解するべき内容が授業者の思惑ほどには定着しないという課題も見えてくる。さらに、『ちはやふる』のようなエンターテインメント漫画の場合、連載終了とともに学生を惹きつける力が大きく失われる可能性もある。古典に苦手意識をもつ学生が「古典和歌に親しもうという気持ちにな」るきっかけづくりとしての漫画の有効性は認めつつ、漫画によらない和歌理解のための授業方法を考えてみたい。

以上の課題をもとに、本稿では、古典和歌と形式を同じくする現代短歌を用いた授業実践報告を行う。当該授業において現代短歌を用いて説明したのは、序詞と本歌取りの単元においてである。

三、序詞について

3-1　序詞の性質

序詞は、「枕詞の長いもの」のように説明されることがあるが、その成立からして全く異なる修辞である。枕詞とは、「古い伝承に基づく有縁性によって、神名や地名などの固有名詞に冠するのが元来であり、称辞的な修飾を本質とする」[11]ものである。一方、序詞については次のように説明される。

主に景物の表現を契機として本旨を導く技巧をもつ歌において、契機となる詞句の方をさす。（中略）元来、序詞は、集団的・社交的な場において、「場所＋景物」という形式に従って景物を提示し、そこから主想部に転換する発想形式であったとされる。

言い換えると、枕詞が元来、固有名詞に冠し、その固有名詞を誉める詞であったのに対し、序詞とは集団的・社交的な場において、その場に共感可能な景物を提示し、そこから「思い」へと転換する修辞と言えるであろう。

序詞と主想部との関係は《音の関係》と《意味の関係》によって説明されるが[12]、《音の関係》を主とするものを①同音（類音）反復によるもの、②掛詞に基づくものに分け、《意味の関係》を主とするものを③比喩に基づくものとして分類するのが一般的である。

以下、『百人一首』からそれぞれに例をあげて確認しておきたい。[13]

① みかの原わきて流るる泉川いつ見きとてか恋しかるらむ

（二七・中納言兼輔）

② たち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む
（一六・中納言行平）

③ 由良のとを渡る舟人かぢをたえ行くへも知らぬ恋の道かな
（四六・曽禰好忠）

①の例は、上句「みかの原わきて流るる泉川」の「泉（いづみ）」が下句の「いつ見」を導いている。「いつ（づ）み」という類音の繰り返しによる序詞である。②の例は、「いなばの山の峰に生ふる」が「まつ」を導く。序詞の文脈での「まつ」は「松」であり、主想部「まつとし聞かば今帰り来む」の文脈での「まつ」は「待つ」であるから、序詞は掛詞によって主想部へとかかる。③の例は、上句「由良のとを渡る舟人かぢをたえ」――潮流の激しい由良海峡において「舟人」が「かぢ」を失うという状態――が、「行くへも知らぬ」――操船できずどこへ行くのやら分からずにただようしかない状態――を導き、「恋の道」の比喩として機能する。

①と②との違いは、序詞と主想部との音の重なりが顕在化しているかどうかのみである。類音が繰り返され、重なりが顕在化していれば①、掛詞として一つの音に二つの意味が内在していれば②である。①②はいずれも《音の関係》を主として主想部へと連接する序詞と言える。しかし、《意味の関係》においても、①②は③とそれほどの差があるわけではない。①の序詞「みかの原わきて流るる泉川」は「いつ見」の語を導き出すためだけに存在するのではなく、とめどなく「わきて流るる」ような恋の思いを比喩するものとしても機能する。②にしても、「いなばの山の峰に生ふるまつ」は「去なば」「待つ」の音を導くためだけに選ばれたのではない。この歌の出典は『古今和歌集』であるが、新編日本古典文学全集『古今和歌集』[14]当該歌（三六五歌）頭注には「稲羽は鳥取県岩美郡にある地名で、歌の作者行平がこの時、国司として赴任した因幡の国名でもある」、脚注には「作者が因幡守として赴任する時に、都での送別の宴で詠まれたとする説、愛する女性に贈られたとする説がある」とある。[15]場の必然性によって選ばれた景なのである。序詞として選ばれる景物とは、歌の場における聞き手（または読者）が状況・心情を喚起し共有できるものであることが必要だということである。

しかし現代の学生たちは、和歌が詠まれた当時の詠作の場を共有していない。それゆえ、主想部の内容と直接的には関係しない序詞になぜこれほどの音数（多いものでは四句にも及ぶ）を費やすのかを理解することが難しく、序詞という技法への理解を妨げているように思われる。そこで、序詞になぜ大幅に音数を割くのかを、学生自身が考えるための授業を展開することを目指した。

3-2 序詞の理解のための授業実践

当該授業では、座席ごとに四人の小グループを作っている。以下

の課題は、小グループで五分程度の話し合いを行い、その結果をグループ代表が発表するという形式で行った。

【課題五】次の二首の現代短歌は、いずれも「あなたが好きだ」という意味です。しかし、その「好き」の思いには少し違いがあるようです。序詞がどのような思いを比喩しているのか読み解き、それぞれの「好き」がどのような気持ちなのか考えてみましょう。

1，不安げにつまんでかじる外郎（ういろう）のかくやはらかくきみに惚れたり　（山下翔『温泉』）

2，いちにちを降りゐし雨の夜に入りても止まずやみがたく人思ふなり　（藤井常世『紫苑幻野』）

《1の序詞から読み解ける「きみ」への気持ち》

《2の序詞から読み解ける「人」への気持ち》

まず、ここで扱う二首の短歌の概要について記しておく。

1の短歌の出典は、山下翔の歌集『温泉』（現代短歌社　二〇一八年）である。[16] 当該歌の主想部は「かくやはらかくきみに惚れたり」であり、その「やはらか」さの性質を「不安げにつまんでかじる外郎の」と比喩している。「やはらかく」とは、「外郎」の食感のような「やわらか」さであり、その中には「外郎」の甘さも含まれていよう。さらに、この「やはらか」さを主体は「不安げ」と感じている。「〜げ」は「外からみて、どうもそれらしい様子である、…の様子、いかにも…という印象をうける」[17] 意である。「外郎」を「不安げにつまんでかじ」っている恋人の様子を主体が見ているという景であろう。ここでは、「外郎」をつまむ時に感じるという「不安」と、その食感の「やはらか」さによって比喩される「きみに惚れたり」という感情がどのようなもので、また主体と相手との関係性がどのようなものであるのかを想像させたい。

2の短歌は、藤井常世の歌集『紫苑幻野』（短歌新聞社　一九七六年）収載の歌である。[18] 当該歌の主想部は「やみがたく人思ふなり」であり、相手への思いの「やみがた」さを「いちにちを降りゐし雨の夜に入りても止まず」で比喩している。永遠に続くような思いを、一日中降り続いた雨が夜に入っても止まず降り続けているようなものだと言う。「やみがた」い恋の思いを、主体が暗さを含む感情と

して捉えていることを押さえた上で、主体と相手との関係性が1とは異なっていることを理解させたい。

3-3　考察

小グループでの話し合いの後、この二首における相手（「きみ」「人」）への主体の気持ちの相違をグループ代表に発表してもらった。この場合、学生の想像力によって歌本文から多少かけ離れた意見が出されることもある。しかし、大浦誠士[19]は序詞部分が表す「思い」の比喩性について次のように述べる。

序詞という形式は、〈景物の文脈〉と〈思いの文脈〉とを、どのように結びつけて解釈すればよいかについては、何も語ってくれません。〈景物の文脈〉から何を受け取り、それをどのように〈思いの文脈〉に重ねてゆくか。それは読む人の感覚（潜在意識）に委ねられているのだと言ってもよいでしょう。

この課題の目的は、序詞に描かれた景が主想部と直接結びつかないものであったとしても、その比喩性によって序詞が主体の「思い」に具体的な形（イメージ）を与えることを理解できるようにすることであった。[20]学生が序詞から想像した「好き」の内実に対しての正否は言わず、1と2の主体の「思い」の違いが序詞から読み取れればそれでよい、とまとめるのみとした。

代表的な意見としては次のようなものがあがった。

- 1は両思いで、2は片思い。
- 1は若い人の恋愛で、2は大人の恋愛。
- 1は相手に対する優しさが感じられ、2は激しさが感じられる。

「あなたが好きだ」という意を表す主想部をもち、かつ序歌である二首の現代短歌を比較することにより、序詞部分を丁寧に読み解くことが主体の心情理解へとつながることを学生は話し合いの中で実感したと考えられる。「序詞」という技法を理解するために必要なのは序詞が使われている短歌を読解することであり、必ずしもその題材が古典和歌である必要はない。学生にとっては、序詞に表現された景を理解しやすい現代短歌のほうが、技法の理解という点では効果的であろうと思われる。

ただし、今回の課題で扱ったのは《意味の関係》による序詞と主想部との関係のみである。藤井常世の短歌は序詞と主想部とが「止まずやみがたく」と同音反復によって連接しているが、その《音の関係》による連接、リフレインがどのような効果をもたらしているのかという点に意識を向けることができなければ、序詞の本来的な意味にまで理解を及ぼすことはできないであろう。それをどのように導いていくかが今後の課題である。

四、本歌取りについて

4-1　本歌取りとは何か

「本歌取り」とは、次のように説明される和歌の技法である。[21]

周知の和歌の表現を意識的に取り入れて、新しい和歌を詠む技法。（中略）藤原俊成および定家ら新古今時代の歌人たちによって、模倣を乗り越える方法が開拓され、詠法として確立した。

当該授業においては、「本歌取り」が単なる模倣とは異なる点について理解できることを目指し、本歌取り歌がどのようにして本歌にない新しい発想を導き出しているのかを学生自身が考えるための授業を展開した。

4-2　本歌取りの理解のための授業実践

小山順子は「「主ある詞」と本歌取り」[22]（小山C）において、本歌取りの典型表現には「凝縮表現」と「否定表現」があると述べる。「凝縮表現」は「本歌の詞を用い、さらには同じ意味を担いながらも、遙かに少ない詞でそれを表現するという技法」である。「否定表現」は、本歌を否定することにより新しさを生み出そうとするものであり、「本歌の発想を基盤にしながらも転換させ、自身の詠もうとする内容を打ち出す効果を、本歌の否定表現は持っている」という。

当該授業においては、例歌の中から「否定表現」を見つけ出す、次のような課題を用意した。学生にとって語彙・語法上の困難さの少ない現代短歌によって、本歌と本歌取り歌の関係と本歌取りにおける引用の意義を確認し、続いて古典和歌の中でも比較的単純な本歌取りについて同じ手順で考えてみることで、古典和歌における本歌取りの方法を認識させようという試みである。[23]

【課題五】次の本歌取り歌が、本歌をどのように踏まえ、どのように新しく展開しているか、考えてみましょう。

本歌：にんじんは明日蒔（あす）けばよし帰らむよ東一華（あづまいちげ）の花も閉ざしぬ　（土屋文明『山下水』）

本歌取り歌：にんじんは明日蒔けばよしと思えない人ら残りて仕事する夜　（鍋島恵子「鳥、東京駅」）

「にんじんは明日蒔けばよし」は、「　　」ということを意味している。本歌は、そのように生活のことを詠んでいるが、本歌取り歌はそれを逆転させ、　　を詠んでいる。

本歌：君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ　（古今和歌集・巻二十・東歌・1093）

本歌取り歌：契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波こさ

じとは　（後拾遺和歌集・巻十四・恋四・770・清原元輔）

本歌では、
ことを約束しているが、本歌取り歌はそれを逆転させ、
を詠んでいる。

鍋島恵子の本歌取り歌は、初二句「にんじんは明日蒔けばよし」がそのまま土屋文明の短歌からの引用である。しかも「と思えない」と続いており、文明歌が台詞として直接引用されている。「人ら残りて仕事する夜」とあるから、これが都会のオフィスにおける残業の風景であることが分かる。なぜそこで「にんじん」を「明日蒔」くという文明歌が引用されなければならないのか。それは、文明歌の文脈を知らなければ理解できない。

文明歌は、鍋島歌に引用された部分に続いて「帰らむよ東一華の花も閉ざしぬ」とある。

アズマイチゲと同属の植物にキクザキイチゲがあるが、この植物は、

早春、ブナ帯の木々が芽吹く頃、到る所で落葉から顔をのぞかせるキクザキイチゲの群落。「春のはかない草花」（スプリングエフェメラル）の代表的な早春植物である。（中略）天気が悪ければ花は開かず、首を垂れる。

と説明される[24]（引用内の傍線は私に付した）。長谷部光奏教授（基礎生物学研究所）に拠れば、「アズマイチゲも同属であり、同じ性質をもつ（長谷部、私信、2020）」という。アズマイチゲには日光のあたらない場所では花が閉じる性質があるということである。

「東一華の花も閉ざしぬ」という表現は、今まで開いていたアズマイチゲの花が、この時になって閉ざしたということを意味している。これは山野で一日を暮らし、夕暮れになったことを表している

（写真1）

（写真2）

伊吹山山麓下板並のアズマイチゲ
（2020年3月22日雨天　筆者撮影）

と考えられる。夕暮れになったので「帰らむよ」と言う。すると、初二句「にんじんは明日蒔けばよし」は、「今日はもう十分働いたのだから、明日出来る仕事は明日にしよう」という意味であることが分かる。この文明歌は、自然に根差した生活の具体相を詠んだ歌なのである。

これに基づいて鍋島歌を読めば、「にんじんは明日蒔けばよし」とは、「にんじん」を「明日蒔」くという具体的な行為ではなく、夕暮れになったのだからもう「帰らむよ」という歌全体の内容を引用しているのだと分かる。そして、「と思えない」という「否定表現」を用いて下句に新たな展開を見せる。「東一華の花も閉ざ」す夕暮れから「夜」へとさらに時間を進め、それでもまだ「帰らむよ」と言えない、都会のオフィスのさまを痛烈に批判している。文明歌があるからこそ、文明の生きた時代とは異なる現代社会への皮肉になり得るのである。

本歌取り歌は、「否定表現」を用いることで本歌とは異なる新たな物語を展開することができる。その新しさが本歌を引用することによって効果的に示されるものであれば、本歌取りは成功していると言える。ここでは、読者が引用元を想起できることによって本歌取り歌が初めて理解できる、または理解が深まるという点が重要である。読者が引用元を想起できること（または想起できる者だけが本歌取り歌を理解できること）を前提に歌が作られているという意味で、「模倣」や「盗用」とは異なるのである。

これが十分理解された状態で、古典和歌を同じように読み解く。

元輔歌の「末の松山波越さじ」の部分が、『古今和歌集』の「末の松山波も越えなむ」の部分を承けている。古今歌は、「君をおきてあだし心をわが持」つようなことが万が一にもあったならば、「末の松山波も越え」るというあり得ない現象が起きるだろうと歌う。それほどに「君をおきてあだし心をわが持」つことがあり得ないことだと強調しているのである。元輔歌はそれを踏まえ、「末の松山波越さじ」と言う。ここで元輔歌が言うのは、「末の松山」を「波」が「越」えるという具体的な現象ではなく、「君をおきてあだし心をわが持たじ」ということである。本歌の内容の最も核となる部分を言わずに、印象的な具体描写だけを引用し本歌全体を匂わせるという点は、鍋島歌の本歌取りと同じつくりである。さらに、本歌取り部分を台詞として引用し、「とは」と直接引用のかたちで承けるのも鍋島歌との共通点である。

さらに「否定表現」は初句「契りきな」によって行われている。「約束しましたよね」という表現は、その約束が相手によって一方的に破られたことを暗示している。元輔歌は、「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」とかつて恋人同士で言い合っ

たにもかかわらず、その約束が相手の心変わりによって破られたことを非難し、失望する歌である。

以上のように、鍋島歌と元輔歌はともに本歌のうち具体描写の一部分のみを引用して本歌全体の内容を匂わせ、それを直接引用のかたちで本歌取り歌に取り込み、否定することで本歌とは真逆にある現状を皮肉り、あるいは嘆くという歌のつくりをしている点で、本歌取りの方法が共通しているのである。

4-3　考察

この課題は、「否定表現」という本歌取りの基本的な表現方法を理解することにより、本歌取り歌がもたらす新しさの発見に繋げることを目的として行ったものであった。しかし、清原元輔は平安中期の歌人であり、平安末期から鎌倉初期に藤原俊成・定家父子によって本歌取りが技法として完成する前の人物である。新古今時代の歌人の歌々に比べ、今回取り上げた元輔歌の本歌取りは非常に素朴である。この例によって本歌取りという技法を十分に説明し得たとは言い難い。

また、この課題では本歌取りの効果のうち、作者と読者との共通の教養背景を前提として本歌の内容がひっくり返された時の知的な面白さを味わうという点に焦点を当てていた。しかし、本歌取りの面白さはこれ以外にも多くある。例えば次のようなものがあげられる。[25]

①自身が直面する状況や心情が古(いにしえ)から普遍的にあるものだと客観的に示すことができる

②自身の言葉よりもさらに的確で美しい言葉によって表現・代弁させることができる

③既知の和歌が引用されることで、読者にとってもその心情を鮮明に想像・喚起しやすくなる

これらを整理して説明できるような教材が開発できれば、より学生の理解を深めることができるのではないだろうか。そのためには、適切な現代短歌の本歌取り歌の収集も、今後必要になる。

おわりに

古典学習への漫画の利用は、古典に苦手意識をもつ学生が興味をもつきっかけづくりとしては有効性がある。一方、漫画の物語内容に学生の意識が向きやすいこと、その漫画を知っている学生と知らない学生との間に意欲の差が出やすいことなどの課題がある。そういった欠点を補うものとして、和歌学習への現代短歌の利用の方法を考えてみたのが本稿である。

当該授業の最後に、「古典和歌の技法（序詞、本歌取り）の説明に現代短歌を使ったことは、あなたの理解の助けになったと思いま

すか」というアンケートを実施し、五一名分の回答を得た。集計結果は以下の通りである。

・助けになった　四六名
・どちらでもない　五名
・使わないほうがよかった　〇名

「どちらでもない」と答えた五名はいずれも自由記述欄の記述がなかった。「助けになった」と回答した学生の自由記述の代表例として次のような意見が見られた。

1，現代短歌の方が興味を持って取り組めたから　（国語・女子）
2，短歌は国語を学ぶうえで比較的身近なため、わかりやすかった。（国語・男子）
3，古典だけだとよくわからないから。　（国語・女子）
4，現代のものを使うことによって本文の意味も理解した上で技法を確認できてよかったです。　（国語・女子）
5，より理解しやすかった。序詞、本歌取りそのものを学びやすくなっていた。　（国語・男子）
6，共通点等を説明の時に使っていてわかりやすかった　（学校心理・男子）

1，2の意見からは、現代短歌が古典和歌に比べて生活実感をもちやすく興味をもてるということに加え、小学校三年生以降の国語の授業で「短歌」という表現形式に触れる機会があることなどから、学生にとって現代短歌が身近なものとして意識されていることがうかがえる。3～5の意見は、古典和歌を用いての説明では和歌の内容を理解するのに精一杯で技法まで理解しようという余裕がないが、現代短歌を用いたことで歌意が比較的容易に理解できるため結果として技法の理解に繋がったという意見と思われる。6の意見は、本歌取りの説明において現代短歌から古典和歌へと段階を踏んで説明したことで、現代語で理解したことを応用して古典和歌に取り組めたことが分かりやすさに繋がったということであろう。

以上のように、「使わないほうがよかった」と答えた学生はおらず、自由記述においてもネガティブな意見は見られなかった。現代短歌を用いた和歌の技法の説明は、学生からは概ね好評だったと考えてよいだろう。今後、和歌の技法を説明するのに適した現代短歌の例をさらに収集することで、中等教育課程における古典の授業にも応用できる教材を開発することができるのではないかと考えている。

注

(1)日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画・国文研主導共同研究「青少年に向けた古典籍インターフェースの

開発」報告書『初中等学校における古典教育』（小山順子編国文学研究資料館　二〇一九年三月）。

(2)小山順子「和歌を「近づける」ための授業実践」『中古文学』一〇三号（二〇一九年五月）。

(3)小山順子「引歌・引用への理解を導く授業実践」『日本文学』六九号（二〇二〇年一月）。

(4)二〇一八年度、二〇一九年度教育学部卒業生の就職先は次の通りである（教員・保育士は公立・私立を分けず、講師を含めた）。

	二〇一八年度（三八二名）	二〇一九年度（三八六名）
小学校教員	二一七名	一九六名
中学校教員	三七名	四一名
高等学校教員	八名	一五名
特別支援学校等教員	一七名	二三名
幼稚園教員	一名	四名
保育士	一六名	一二名
施設職員	三名	二名
一般企業	四〇名	五九名
公務員	一八名	一五名
進学	一五名	一五名
その他	一〇名	四名

なお、国語専修の卒業生の就職先は次の通りである（統計の取り方は先と同様）。

	二〇一八年度（四三名）	二〇一九年度（四七名）
小学校教員	二八名	二六名
中学校教員	七名	八名
高等学校教員	一名	四名
施設職員	〇名	一名
一般企業	四名	五名
公務員	〇名	一名
進学	一名	二名
その他	二名	〇名

(5)国語の専門科目は、国語専修の学生の他、特別支援教育専修および学校心理専修の学生のうち、中学校・高等学校教諭一種免許状の取得にあたって国語を選択した学生が履修することができる。以下、国語の専門科目を履修することのできる学生のことを「国語を選択した学生」と記す。なお、二〇一九年度の国語専修一年生の総数が五五名であるので、国語専修の約八五％の学生が当該科目を履修していることになる。

(6)第一回授業時に、「この授業で身につけたいことや不安なことなどを自由に書いてください」というアンケートを実施したと

ころ、以下のような回答が得られた。

・センター試験・二次試験までは頑張って勉強したけれど、ここ数ヶ月は全く古典に関わっていないから、ほとんど忘れてしまっている。（国語・女子）

・高校の時に身に付けた文法・単ゴ（ママ）が抜けてしまっている所が多いと思うので再度確認したい。（国語・女子）

・古典自体が久しぶりなので少し不安。（学校心理・男子）

(7)末次由紀『ちはやふる』（講談社　二〇〇八年～）。

(8)「ふれあい実習校」とは、一年次の実習科目「ふれあい体験」において実習先となった小学校のことを指す。

(9)本歌取りの効果についての説明に末次由紀『ちはやふる』（注7）、『百人一首』の成立背景についての説明に杉田圭『超訳百人一首　うた恋い。』（メディアファクトリー　二〇一〇年～）を用いた。

(10)『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー　二〇一四年）。「枕詞」の項目執筆者は白井伊津子。

(11)注10に同じ。「序詞」の項目執筆者は白井伊津子。

(12)白井伊津子『古代和歌における修辞』（塙書房　二〇〇五年）後篇「序詞の表現形式」を参照した。

(13)本稿における『百人一首』の引用は、鈴木日出男・山口慎一・依田泰『原色小倉百人一首』（文英堂　二〇一四年）に拠った。

(14)新編日本古典文学全集『古今和歌集』（小学館　一九九四年）。

(15)この歌を、因幡から都へ戻る時のものとする説もある。浅田徹『恋も仕事も日常も　和歌と暮らした日本人』（淡交社　二〇一九年）第一章「贈り合う歌」の「旅立ちと餞けの歌」の項に、「彼が因幡国（鳥取県）から帰って来る時の別れの宴での作だと思います。「この因幡を後にしても、あなた方が待っていると聞いたら、すぐに帰ってきましょう」ということです。もちろん、そんなことを言っても実際に戻って来るはずはありません。しかし、今でも引っ越しなどでクラスメートと別れる時、旅立つ側は、「絶対また遊びに来るから！」と言って手を振ったりしませんか。現実には無理でも、そう言ってしまう気持ちは、嘘ではないはずです。」（p54）とある。

(16)初出は『現代短歌』二〇一六年一二月号（現代短歌社　二〇一六年一二月）の《現代短歌社賞・次席二十首抄》「湯」（安田純生選）。

(17)“げ【気】”，日本国語大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com,（二〇二〇年七月二一日閲覧）。

(18)本稿における引用は、俵万智『あなたと読む恋の歌百首』（文春文庫　二〇〇五年）に拠った。

(19)渡部泰明編『和歌のルール』(笠間書院　二〇一四年)第2章「序詞」(p38)。

(20)注19著書第2章「序詞」には、「序詞というのは、(中略)何も具体性を持っていない〈思いの文脈〉に、具体的な情景(〈景物の文脈〉)を重ねることで、恋心に具体的な〝かたち〟を与える働きを持っているのです」(p35)と説明されている。

(21)注10に同じ。「本歌取」の項目執筆者は渡部泰明。なお、藤原定家によって確立し、『詠歌大概』『毎月抄』などに明文化された「本歌取り」のルールには、①時代の近い歌人の歌(七〜八〇年以内に詠まれた歌)は取ってはならない、②三句以上取るのは取りすぎである(二句+三〜四字までは許される)、③本歌とは別の主題で詠む、などがある。しかし当該授業において初めて「本歌取り」に触れる学生もいる中で、そのような詳しいルールを紹介することは控えた。

(22)小山順子「「主ある詞」と本歌取り」『和歌文学研究』一一二号(二〇一六年六月)。

(23)ここに提示した短歌・和歌の出典はそれぞれ次の通りである。土屋文明『山下水』は土屋文明自選『土屋文明歌集』(岩波文庫　一九八四年)に拠った。鍋島恵子「鳥、東京駅」は『短歌』二〇一五年一一月号(角川文化振興財団　二〇一五年一〇月)における「第六十一回　角川短歌賞　選考座談会」による引用に拠った。『古今和歌集』は新編日本古典文学全集『古今和歌集』(注14)に拠った。『後拾遺和歌集』は新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』(岩波書店　一九九四年)に拠った。

(24)「森と水の郷あきた　あきた森づくり活動サポートセンター総合情報サイト」http://www.forest-akita.jp/data/sanya-hana/04-kikuzaki/kikuzaki.html(二〇二〇年三月一九日閲覧)。

(25)注3小山B論文参照。なお、小山B論文では「引歌による効果」を十項目に分けて説明している。

[謝辞]

本稿を成すにあたって、本学教育学部の川上紳一教授に、基礎生物学研究所の長谷部光奏教授をご紹介いただきました。両先生方に心より感謝申し上げます。また、伊吹山ネイチャーネットワークの筒井杏正様に、伊吹山山麓下板並のアズマイチゲ自生地の場所をご教示いただきました。御礼申し上げます。